

1. はじめに

日本語のテイル形には、「葉っぱが地面に落ちている」のように、ある変化が起こった結果、対象がどのような状態にあるのかを表す用法がある¹。一方、変化が起こっていないにもかかわらずテイル形が使われる場合がある。Matsumoto (1996) は (1) や (2) などの表現を挙げ²、その状態が最初から成立している場合でも（「丸くなる」といった変化が実際には起こってなくても）テイル形が使用される例だとしている。

(1) その部屋は丸くなっている。 (Matsumoto 1996: 124)

(2) この家は歩道に {突き出ている / 飛び出ている}。 (ibid.: 136)

このような表現は、まるで変化の結果であるかのように状態を描写する表現であると考えられており、「仮想変化表現」と呼ばれている³。仮想変化表現では実際の時間軸に沿った変化を描写しているわけではないので、時間を表す副詞「もう」などを加えて「その部屋はもう丸くなっている」(Matsumoto 1996: 126) とすることはできない（佐藤 2005: 51 も参照）。

仮想変化表現については、その内実も不明な点が多く、テイル形以外の表現の分析も進んでいない。また、英語の仮想変化表現にどのようなものがあるかについても十分に議論がなされていない。本発表は、仮想変化表現の研究が進展するための足掛かりとなるべく、問題の整理と考察すべき論点の提供を行いたい。

2. 代表的な先行研究

仮想変化表現を扱った先駆的な研究として国広 (1985) がある。国広は (3) の例を挙げている。

(3) 駅前に町の主だった建物があつまっている。 (国広 1985: 10)

国広 (1985: 8) は、(3) のような位置関係を表すのに変化表現が用いられるのは「客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのようにとらえている」からであると述べている⁴。

それでは、どのような場合にこの種の「かのように」という捉え方が採用されるのだろうか。それを考察したのが Matsumoto (1996) である。Matsumoto は以下の表現を挙げている。

(4) a. その部屋は丸くなっている。 = (1)

¹ 本発表では位置関係は状態の一種であるとして記述する。

² Matsumoto (1996) の日本語例文はアルファベットで表記されているが、ここでは漢字かな表記に直して引用した。

³ Matsumoto 自身は (1) や (2) のような表現を *subjective-change expression* と呼んでいる。*subjective change* (主体変化) と *fictive change* (仮想変化) は実質的に同じ意味であるが、本発表では「仮想変化」という用語で統一することにする。

⁴ 国広 (1985) はこのような捉え方を「痕跡的認知」と呼んでおり、テイル形以外の表現も扱っている。痕跡的認知の例として国広が挙げる表現と Matsumoto が言う *subjective-change expression* には違いがある (Matsumoto 1996: 136–143) を参照。

- b. #その部屋は四角くなっている。 (Matsumoto 1996: 129)
- (5) a. 角が {落ちている / 欠けている / 取れている}。
- b. ??角が付いている。 (ibid.)

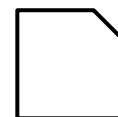


図 1

(4a) は最初から丸い形状として作られた部屋を指すのに用いることができる。同じく (5a) は、最初に長方形を描いてそこから角を取る、という行為を行ったわけではなく、はじめから角がない図形 (図 1) を描いたとしても、その図形を指すのに使用可能である⁵。これらは通常予期される形状 (部屋であれば四角いもの、図 1 であれば角がある理想的な正方形) からのずれ (逸脱) を感じられる例であり、標準形から変化した結果であるかのように当該の形状を捉えることが、テイル形を用いることの動機づけになっていると、Matsumoto は指摘している。一方、典型的な四角い形状の部屋をテイル形で表現するのは普通ではなく、(4b) は通常は用いられないとされる (??ではなく#という記号が用いられているのは、話し手が、一時的であったとしても、部屋の形状として丸いものを想起していた場合は許容できると考えられるため)。同様に、通常の正方形を (5b) のように言うのは不自然に感じられる。したがって、仮想変化という概念化がなされるのは、描写対象に何らかの点で意外な (unexpected) 面や普通でない (unusual) 性質がある場合であり、テイル形はそれを表す手段の一つであると言うことができる。

3. 取り上げたい論点

本発表では、Matsumoto (1996) を出発点に、以下の3点について考えたい。I-III の問いを第4節から第6節で順に取り上げることとする。

I. 仮想変化表現は意外性、逸脱性を表すものに限られるか (第4節)

(1) 「その部屋は丸くなっている」は意外性、逸脱性といった特徴づけが妥当のように感じられるが、(2) 「この家は歩道に {突き出ている / 飛び出ている}」は意外というほどのものではないように感じられる。仮想変化表現として扱うべきものには、意外性、逸脱性を感じさせるものからそうでないものまで、様々なものが含まれるのではないだろうか。

II. 仮想変化を表す日本語表現はテイル形以外にどのようなものがあるか (第5節)

Matsumoto (1996: 128) は「丸くなっている部屋」と「丸くなった部屋」という表現を比べ、前者は仮想変化表現として使用できるのに対して、後者は丸くなるという変化を経た部屋という、実際の変化の解釈しか許容されないと述べている。それでは、タ形は仮想変化表現に使われないのだろうか。

III. 仮想変化を表す英語表現は形容詞的受身以外にどのようなものがあるか (第6節)

Matsumoto (1996: 134, 148) は、英語では結果状態を表す受身 (以下、形容詞的受身) が仮想変化表現として用いられると述べている。Matsumoto は日本語の (5b) に近い英語の表現として (6) を挙げている。それでは、英語の仮想変化表現には他にどのようなものがあるだろうか。

- (6) a square with a corner {rounded off / cut off} (Matsumoto 1996: 134)

⁵ (5a) はもともと国広 (1985: 13) が挙げていた例であるが、ミニマル・ペアを作り、(5b) と対比して提示したのは Matsumoto (1996) である。

4. 比較の性質から見る仮想変化表現

まず、以下の実例について考えてみたい（以降の例文における強調は引用者による）。

- (7) 味噌は本来長期保存を目的とした食品です。味噌蔵で適切な温度と湿度を保てば何年間も保存できます。家庭で常温で保存しても腐敗や変敗することはないとのこと。 (中略) というのが、伝統的な味噌の話ですが、近ごろの味噌は塩分が少なくなっているので長期保存に適していません。⁶

下線部「近ごろの味噌は塩分が少なくなっている」は、副詞「もう」などを付け加えることができず、(1)「その部屋は丸くなっている」などと同じく仮想変化表現だと考えられるが、一方でその種の味噌が存在することは意外なことではなく、その点は(1)とは異なる。また、(7)は「伝統的な味噌」から「近ごろの味噌」への変化が十分に読み取れる例であり、(1)に比べると「仮想的」という側面が弱いように感じられる。(7)のような例も適切に位置づけられるように、仮想変化表現の種類を整理したい。

ここで、仮想変化表現は意外性を表すかどうかにかかわらず「変化表現を使って比較を表す表現手段」と考えてみよう。そもそも変化というのは、ある対象の一時点の状態と別の時点の状態を比較することで認識されるものであり、変化概念自体に比較という認知プロセスは含まれていると考えられる⁷。実際の変化の場合、同一個体の異なる時点での状態を比較するわけであるが、(1)のような仮想変化表現の場合、あるものの標準形（理想形）と描写対象の個体を比較していることになる。これを「標準比較」と呼ぶことにしよう。一方で、(7)では「伝統的な味噌」と「近ごろの味噌」が比較されている。「近ごろの味噌」というのは、味噌に改変を加えているうちに作られた味噌の一種であり、また「伝統的な味噌」もそれが作られるにあたり、様々な改変を経たと考えられる。したがって、(7)では同一タイプの異なるバージョンの間で比較が行われていると言うことができる。このような比較を「バージョン比較」と名づけることにする。複数種類の商品が作られる過程では、あるバージョンに実際に変化を加えて異なるバージョンが作られている。「近ごろの味噌」の個体は最初から塩分が少なくなるように作られているが、このバージョンの味噌が作られる過程として実際の変化を想起することができる。また、塩分の少ない味噌は商品としては現在ありふれたものの一つであり、それ自体は意外性を感じるものではない。バージョン比較が関わる場合は、意外性という要素は必ずしも重要ではないと言える。

これとはまた少し異なる比較に、「部分比較」とでも呼べるものがある。同一個体内のある部分と別の部分の形状や色などを比較するものであり、(8)のような例を作ることができる（つま先とそれ以外の部分の比較）。佐藤（2005）が挙げる（9）も同様の例である。

- (8) この靴はつま先が尖っている。 (作例)

- (9) このユニフォームは肩の部分だけ青くなっている。 (佐藤 2005: 61)

この他に(10)のような表現もある。Matsumotoは(10)の例を挙げ、真珠の大きさについては必ずしも基準がどのようなものかわからないため、仮想変化表現(10a)はそのままでは使用しづらいが、一続きに

⁶ https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1190035436

⁷ この点はLangackerが言う「主体化」(subjectification)の観点から分析するのが有効だと考えられる。詳しくはLangacker(1998, 2008)や野中(2019)を参照。

つながった真珠のうち一つだけが小さいことがわかるという文脈であれば、その場限りではあるが基準となる大きさが設定されるので、(10b) は自然になるとされる。ここでは一時的に並列された個体間の比較が行われている。これを「並列比較」と呼ぶことにしよう。

(10) a. ?この真珠は小さくなっている。 b. この真珠だけ小さくなっている。(Matsumoto 1996: 131)

以上のうち、もっとも意外性が感じられるのは標準比較ではないかと思われるが、バージョン比較、部分比較、並列比較をも含めて仮想変化表現であるとするなら、描写対象に意外性が感じられるというよりも、変化表現で比較を表すというのが仮想変化表現の特徴づけとしてより重要になってくるだろう。このような分類をすることで、たとえば部分比較と並列比較では「だけ」のような表現を伴いやすい、といった特徴を記述することもできるようになる。ここまでに挙げたものを整理すると表1のようになる。表1には実際の変化を表す表現も含めている（これは「時間比較」と呼ぶことにする）。

表 1. 比較の種類から見た仮想変化表現

	比較の種類		例文
実際の 変化	時間比較	同一個体の異なる時点での状態を比較	葉っぱが地面に落ちている。
仮想 変化	バージョン比較	同一タイプの異なるバージョンを比較	(7) 近ごろの味噌は塩分が少なくなっている。
	部分比較	同一個体内の一部分と別の部分を比較	(8) この靴はつま先が尖っている。
	並列比較	同一タイプの一時的に並列された個体を比較	(10b) この真珠だけ小さくなっている。
	標準比較	同一タイプの標準形(理想形)と当該個体を比較	(1) この部屋は丸くなっている。

このような分類は可能であるものの、一つの表現に上記のうち複数の比較が関わっている場合もある。たとえば、(11) では六角レンチの先端と他の部分を比較している点では部分比較だと言えるが、六角レンチの種類を紹介しているという点ではバージョン比較だとも言える。

(11) 六角レンチには、先端が丸くなっているものがあります。これはボールポイントといわれるもので、角度 20 度くらいなら六角穴に斜めに差し込んでも回せるように作られています。狭い場所ではまっすぐに入れない場合もあるので、このボールポイントがあるととても便利です。⁸

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) で見つかった以下の例では、窓の標準的な形状と飛行機の窓の形状を比較していると見れば標準比較にあたる。一方、初期の飛行機の窓は四角だったものの、改良を経

⁸ <https://www.ites.co.jp/repair/rokkaku.html>

るうちに丸いものが採用されるようになったことを知っている者にとっては（(12)の著者にはその知識があると思われる）、バージョン比較も想起されているように思われる（「角を丸くしておく」（二重下線部）という変化を表す表現が用いられているのも興味深い）。

- (12) なぜ、飛行機の窓は角が丸くなっているのか？飛行機の窓は、どんなことがあっても割れないようにできている。少しでも窓にヒビが入れば、機内の空気が外部に吹き出して、大事故につながりかねないからだ。飛行機の窓の角が丸くなっているのも、割れにくくするための工夫。四角いと、衝撃を受けたとき、角の一点に力が集中して割れやすくなる。角を丸くしておくほうが、力が分散され、割れにくいのだ。 (BCCWJ 『知ってど一なる！？こんな疑問 600』)

5. テイル形以外の仮想変化表現

Matsumoto (1996) は実質的にテイル形に限って仮想変化表現を考察しており、それ以外の形式も仮想変化表現として使われるかについては十分な議論がない。第3節で述べた通り、Matsumoto はテイル形の「丸くなっている部屋」とタ形の「丸くなった部屋」のうち、仮想変化表現に当たるのは前者のみであるとしている。しかし、このようなテイル形とタ形の対立は常に見られるわけではない。以下の例ではテイル形でもタ形でも (8) や (11) に近い表現として理解することができる（作例）。

- (13) a. つま先が尖っている靴 b. つま先が尖った靴
(14) a. 先端が丸くなっている六角レンチ b. 先端が丸くなった六角レンチ

また、動詞のテイル形以外に、「減塩（味噌）」などの表現も可能であり、これも仮想変化表現として扱うべきものだろう。ただし、このような表現が成立するかどうかについては、慣習性によるところも大きい。たとえば、「減塩」とは言っても、「減カロリー」や「減糖」とは普通は言わない。こうした慣習性にも注意して言語表現を観察していく必要がある。

- (15) 我が国社会が高齢化しつつあるなかで、栄養のバランスや食品の安全性に対する関心が強まっており、いわゆる自然食品、低カロリー食品、減塩食品、低糖食品等の需要が生まれている。 (BCCWJ 『農業白書』1988年)

6. 英語の仮想変化表現

英語の仮想変化表現の例として、*scattered villages* (Langacker 2008: 530) や *reduced fat mayonnaise* (坪井 2014: 66; 野中 2019: 29) なども報告されており⁹、仮想変化表現として用いられる形容詞的受身についてはある程度分析がある。それでは、英語の仮想変化表現は他にどのようなものがあるだろうか。

Matsumoto (1996) は (2) 「この家は歩道に {突き出ている/飛び出ている}」に当たる英語として (16) を挙げているが、この表現は単純現在形であり、特に変化・結果という概念が関わっていると言える証拠はな

⁹ *reduced fat mayonnaise* は元々は Koontz-Garboden (2011) が挙げた例であるが、Koontz-Garboden 自身はこの例を仮想変化表現として分析を行っているわけではない。

いとしている。

(16) The house sticks out onto the sidewalk.

(Matsumoto 1996: 148)

しかし、stick (out) が stick one's tongue out のような位置変化の用法を持つことを踏まえれば、たとえ形容詞的受身のような結果状態を表す構文で用いられていなくても、(16) に変化や結果の概念——仮想上の変化を経てその位置にあるとする捉え方——が関わっている（だからこそ、位置変化の用法も持つ stick (out) という表現が用いられている）と考えることができるだろう。実際、Talmy (2000) は単純現在形の (17) が仮想的な位置変化が関わる表現だとしている（(17) は国広が挙げた (3) 「駅前に町の主だった建物があつまっている」に対応する例であると言える）。

(17) The palm trees clustered together around the oasis.

(Talmy 2000: 135)

また、Jackendoff (1990: 107) が挙げる The tree touches the house. は仮想上の接触の結果として分析できるのではないだろうか。日英語どちらの場合でも、仮想変化表現はさまざまな言語形式を抱える複雑なネットワークを形成していると考えられるべきだろう。

7. まとめにかえて

「葉っぱが地面に落ちている」は実際の変化の表現だと述べたが、実際に葉っぱが落ちる場面を見ていなくても、葉っぱが落ちた結果であると推論していればこのような表現を使うだろう。「財布が落ちている」になると、実際に落ちる場面を見るほうがまれであり、推論に依拠する側面はより強くなると言える (cf. 寺村 1984: 136)。だとすると、実際の変化の表現にも実は仮想性が忍び込んでいるのではないだろうか。Matsumoto (1996: 151 注3) は「太っている」を単純状態表現としているが、この表現にも仮想変化は見いだせないだろうか。仮想変化表現の射程は、従来考えられているよりもずっと広いものだと言える。

参考文献

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. Cambridge, MA: MIT Press. / Koontz-Garboden, Andrew (2010) The lexical semantics of derived statives. *Linguistics and Philosophy* 33: 285–324. / 国広哲弥 (1985) 「言語と認知表現」『言語研究』88: 1–19. / Langacker, Ronald W. (1998) On Subjectification and Grammaticization. In Jean-Pierre Koenig (ed.), *Discourse and cognition: Bridging the gap*, 71–89. Stanford: CSLI Publications. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. / Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.), *Spaces, worlds, and grammar*, 124–156. Chicago: The University of Chicago Press. / 野中大輔 (2019) 「英語の場所格交替と形容詞的受身: 主体化と好まれる言い回しの観点から」『日本エドワード・サピア協会研究年報』32: 25–40. / 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』東京: 笠間書院. / Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, vol. 1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press. / 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』東京: くろしお出版. / 坪井栄治郎 (2014) 「属性と変化についての覚え書き」*Language, Information, Text* 21: 57–68.